

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（教育学）	氏名	劉 一 杰
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目			
「気になる子」への保育者の理解に関する研究			
論文審査担当者			
主査	教授	栗原 慎二	
審査委員	教授	山内 規嗣	
審査委員	教授	児玉 真樹子	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、現職の保育士・幼稚園教諭（以下保育者）を対象とし、保育者の「気になる子」に対する子ども理解の的確性に影響を及ぼす要因について検討し、「気になる子」に対する理解の構造を明らかにすることを目的とした研究である。</p> <p>本論文は、5章で構成されている。</p> <p>第1章は本研究の背景と目的である。保育園には、「明確な診断はつけられていないが、保育者が保育に困難さを感じ、その背景に何かしらの課題を抱える子ども」がいる。こうした子どもを先行研究では「気になる子」（日高・橋本・秋山，2008；久保山・斉藤・西牧・當島・藤井・滝川，2009 など）として論じている。本研究でもこの定義に基づいて「気になる子」の理解の必要性、また省察、保育観、信念などが子ども理解に与える影響について検討している。</p> <p>第2章では、研究1として、保育者の「気になる子」への子ども理解の現状を把握し、その上で保育者の研修時間および保護者との直接交流時間が子ども理解の的確性に影響を与えていることを明らかにした。すなわち、普段から悉皆的な研修に参加したり、学習をしたりすることで専門性を向上させることは十分可能であり、よく研修すればするほど「気になる子」に対する理解が深まり、適切な対応ができるようになると考えられた。また、保護者との交流を重視することで、保育者が観察できる園内の子どもの状態だけでなく、園外での様子についての情報も把握でき、本研究における子ども理解の定義である「気になる子どもの問題行動の背景を多視点・多方面の情報から考慮し、多様な可能性および仮説を想定すること」に繋がると考えられた。</p> <p>第3章では、研究2として、第2章（研究1）の結果を踏まえ、保育者の専門性向上のためには勤務年数や経験の積み重ねだけでは効果は十分ではないと考え、障害児保育経験と省察に着目し、これらが子ども理解の的確性に及ぼす影響についてモデルを構築し、検証した。共分散構造分析の結果、短期及び長期の子どもの発達に関する分析的省察である「子ども分析」（杉村・朴・若林，2009）は子ども理解に有意な正の影響を及ぼしていたのに対し、短期及び長期の自己の保育に関する省察である「自己考慮」（杉村ら，2009）は子ども理解に有意な負の影響を与えていた。このことから、日頃から子ども自身のことを丁寧に観察して発達の特徴を把握したり、自分の言動が子どもにどう映るか考えたり、子どもの些細な変化も見逃さないようにすることがコルトハーヘン（Korthagen,F.A.J.,2001）の提唱するALACTモデルの「本質的な諸相への気づき」に繋がると考えられた。一方で、保育者の行う「自己考慮」は、省察ではなく反芻になってしまった故に、子</p>			

ども理解に負の影響を与えた可能性が考えられた。また、障害児保育経験も子ども理解に対して有意な影響がみられたが、これもいわゆる「普通と違う子」、「気になる子」を経験したことが多ければ多いほど、違和感に気づきやすくなり、「本質的な諸相への気づき」が生じ、さらに、似たような事例を見たことがある、経験したことがあるという安心感も加わり、過去の経験から仮説を立てやすくなり、よりの確な子ども理解に繋がった可能性が推察された。

第4章では、研究3として、第3章(研究2)で行った共分散構造分析の結果から、子ども理解の決定係数が比較的lowかったことを踏まえ、省察と障害児保育経験の他にも、子ども理解の的確性に影響を及ぼしている要因があると考え、省察と保育者の信念が保育観の転換を生じさせ、子ども理解の的確性に影響を及ぼすというモデルを構築し、検証した。その結果、他者との会話や他者の保育によって得られた情報を自己の保育の省察に利用する省察である「他者情報利用」(杉村ら, 2009)は、「子ども中心保育観」に有意な正の影響を及ぼしていた。これは上山ら(2015)が、他者との交流を通じた省察により、子どもや保育を客観的に捉えなおすことができると述べているように、他の保育者の保育実践を観察したり、保育観・保育方針の話を開いたりすることで、ALACTモデルにおける「本質的な諸相への気づき」が可能となり、自身の保育観の再認識と見直しに繋がったと考えられた。一方で、子ども理解をする際に背景にある要因について重視する「背景信念」は「子ども中心保育観」に有意な正の影響を与えており、「管理的保育観」には有意な負の影響、そして「管理的保育観」の意識を改善することでよりの確な子ども理解に繋がることが示された。さらに、「背景信念」は直接子ども理解にも正の影響を及ぼしていた。

第5章では、これらの結果を総合的に考察し、次のような示唆を得た。(1) 保育者の専門性を向上させるには研修が必要不可欠であるが、その研修を通じて「本質的な諸相への気づき」に繋がる省察が行われているかが重要と考えられること、(2) 障害児保育経験がよりの確な子ども理解に有意な影響を与える可能性が示唆されたが、その場合においても、十分な省察をしているかが重要と考えられること、(3) 他者との交流を通して自己を省察することを重視し、子どもの背景について多視点・多方面から着目する信念は重要であり、保育観の転換に影響を及ぼし、よりの確な子ども理解に繋がると考えられること、の3点である。

本論文は次の3点において高く評価することができる。

- ① 保育者の研修時間、保護者との直接交流時間、「本質的な諸相への気づき」に繋がる省察、障害児保育経験、保育者の信念および保育観が子ども理解の的確性に影響を与えていることを明らかにしたこと。
- ② 信念項目の下位因子である「背景信念」と、省察尺度の下位因子である「他者情報利用」が保育観の転換に影響を与えており、子ども理解の的確性の向上に繋がることが示唆されたこと。
- ③ 以上の結果から、より保育者の専門性の向上に繋がる研修のあり方と展望を提案したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6年 2月 15 日